

J S A 北海道支部ニュース

No. 280 2005. 6.22

日本科学者会議
北海道支部
事務局 〒060-0807
札幌市北区北7条西1丁目
バームハイツ札幌201
振替 02740-1-6811
TEL. FAX (011)707-2299
Eメール jsa-hokkaido@mc6.sings.jp

北海道支部 ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp/hokkaido/>
JSA 本部ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp>

北海道科学シンポジウム「PCB処理の安全性を考える」報告-----	1
2005年度支部大会開かれる----「科学シンポ、院生の活動などで意見交換」-----	2
会員研究談話室「技術」観の源流--『史記』の「貨殖列伝」と西周の『百学連環』-----	3
2005年度全国大会報告--北村代表幹事が特別報告、規約改正案を採-----	3
2005年度全国大会報告に参加して-----	3
新支部役員-----	4

北海道科学シンポジウム「PCB処理の安全性を考える」報告

標記のシンポジウムが、4月17日(日)午後1時30分から5時30分まで、室蘭工業大学学生会館で行われた。今年3月に北海道と長野県以北15県のPCB廃棄物処理を行う施設が室蘭市に建設されることを受けて、市民の間にPCB処理についての関心が高まっていることを反映してJSA会員を含む135名の参加があり、活発な討議となった。会場には室蘭工業大学学長田頭博昭氏が見えられて、シンポジウムが成果を出すようにとのご挨拶を頂いた。

環境省が「ポリ塩化ビフェニール廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」(PCB特措法)に基づいて、2016年までにPCB廃棄物をなくすという計画を受けて、室蘭市は北海道のPCB廃棄物に限って処理する方向で動き、この問題について室蘭市は市民に対しても北海道のPCB廃棄物処理に限定することを約束していた。環境省も長野以北15県のPCB廃棄物の処理のために、北海道以外に2カ所の処理施設建設計画を持っていた。ところが急に2003年11月に環境省が道外15県のPCB処理を室蘭市に要請し、2004年1月には宮城県知事、新潟県知事、富山県知事が15県を代表する形で、北海道と室蘭市を訪れ、施設建設を要請してきた。

なぜ急変したのかその理由はわからない。2月には道と室蘭市は受け入れる方向で検討することを約束し、2月14日から17日にかけて室蘭市は市民説明会を開いた。市民説明会では市側は安全であると言うことの一点張りで、道外のPCB廃棄物は処理しないと約束していたのにそれが変更になった理由、処理方法やそれに付随するさまざまな疑問や質問にはほとんど答えることはなかった。説明会のあと、処理施設建設受け入れを決定した。決定した後は、これでPCB廃棄物処理問題は終わったかのように市側はほとんどPCB問題に対応していない。

2004年12月から2005年1月初旬にかけて、地方紙「室蘭民報」が一面トップを使ってPCB処理が如何に安全に行われるかという特集が組まれた。処理プラントの入札は12月24日に予定されていた。しかし事業主体の日本環境安全事業株式会社が処理技術の審査を厳格化したことによって、プラント建設の入札は3ヶ月伸ばされた。3月に新日鐵、日鋼、神鋼の鉄鋼関連3社JV(異工種共同企業体)が落札した。室蘭民報はまたここで再び処理の安全性を強調した。

こうした安全宣伝が地元を賑わしている中で、室蘭市議会議員は一部を除いて、室蘭市は「迷惑施設」を受け入れたのであるから、国は見返りに予算をつけて欲しいという陳情団を組織するなど奇妙な行動があった。これまでの経過を見ると、処理事業を実際に行う日本環境安全事業側は、PCB処理の難しさを一定認識しているのに対して、室蘭市や道、地元産業界に責任感や危機意識の薄いことが浮き彫りになってきた。シンポジウムはこうした状況を受けて、日本環境安全事業株式会社の技術陣にも参加してもらって、PCB廃棄物処理の中で起きると考えられる問題の事実認識を中心に検討しようとして計画した。話題提供は、日本環境安全事業株式会社・技術課長の立川祐隆氏が「PCB廃棄物処理について」、九州大学名誉教授・日本科学者会議公害環

境問題委員の安東毅氏が「PCBの毒性及び処理問題」、室蘭工業大学環境科学防災研究センター助教授沢田研氏が「ダイオキシンと培養細胞系を用いた環境化学物質の評価」、市民団体のPCB処理の安全を考える会から河野秋昭氏が「市民の目から見たPCB問題」のタイトルで行った。最初にも述べたように、議論は事実の確認ということを重視したので、問題になる点について、考えを述べ合うという形にはならなかった。このことは今後の問題となる。問題となった点は多岐にわたるので、ここではそのことについて書かない。大会報告書の形で作られたビデオやDVDを整理しているので、利用して欲しい。

(室蘭工大・橋本忠雄)

2005年度支部大会開かれる

—科学シンポ、院生の活動などで意見交換

2005年度支部大会が、5月15日(日)北大工学部で行われました。出席者は19名で、内訳は、北大工(3名)、農、教育(院生、自由参加)、北海学園大、札学院大、北見工大(2名)、稚内北星大(2名)、道研究団地及び個人会員(7名)です。

山田代表幹事の開会挨拶後、議長に沼辺さん(道研究センター)と照井さん(北見工大)を選出し議事に入った。報告された班、研究委員会等の活動を以下いくつか紹介する。北見工大;10名ほどで総会を開いた。「徹底検証 大学法人化」を使って学習会を開いた。稚内北星大;新任教員の方にはたらきかけ会員になってもらった。第3水曜の会;会員が増える傾向にある。支部事務職員の負担軽減のためにニュースレター配布の手伝いを検討している。支部活動報告のうち会員数の増減は、会員増が10名(うち転入2)、減は21名(うち転出2)でした(5月11日時点)。

活動方針では以下のような意見交換が行われた:科学シンポジウムについては、バイオマスなどの自然エネルギー関係をテーマに開くことについて話題となり、早期に常幹で検

討すべきという意見が出された。他に憲法問題での取組、院生交流の場の設定、班への訪問常幹会議などについて意見が出された。院生会員からは、他の院生会員と接点を持ち交流したい、メーリングリストをつくることなどについての意見が出された。

予算案については、15ヶ月分の本部納入を予算化しているが、厳しいと思われるので、何年かで計画的に滞納を解消してはどうかなどの意見が出された。支部財政対策のうち、募金活動については、会員の方に分かる趣旨説明資料を用意する必要があるとの意見が出された。

提出された報告案、方針案、決算・予算案及び役員案はすべて承認され、全国大会代議員を選出しました。大会後開催した第1回幹事会で支部代表幹事及び常任幹事を選出しました。決算・予算及び支部役員を別項に掲載します。また、全国大会の議案に付いての意見交換では、大会を隔年開催から毎年開催にする規約改正案が出されているが、財政的に問題ないかとの質問が出された。

(事務局長・江見清次郎)

会 員 研 究 談 話 会

「技術」観の源流—『史記』の「貨殖列伝」と西周の『百学連環』

初めての試みは稚内北星大の 姫宮 利融氏が上記の題で支部大会のあと次の5項目で1時間近くのお話がありました。

- 1、漢語としての「技術」。
- 2、『史記・貨殖列伝第69』。
- 3、江戸末期の技術思想。
- 4、西周『百学連環』における「技術」。
- 5、技術の独自性の自覚。

時間がなく意見交換が十分に出来なかったのが残念でした。

(北大工 一條真古人)

全国大会に出席して

北村代表幹事が特別報告、規約改正案を採択

5月28日、29日東京の明治大学及び日本大学歯学部で開催された全国大会に出席してきました。北海道支部の代議員として千葉全国常幹、水野支部常幹及び私の3名が出席しました(水野さんは2日目のみ)。他の代議員の方も感想を書かれる予定ですので重複するかも知れませんが、以下簡単に報告します。

私が全国大会に出席するのは今回で4度目だと思いますが、今大会の印象としては前大会につづき、院生会員、女性会員をはじめとして活発な議論があったということです。

大会では北村代表幹事の特別報告「日本科学者会議の40年—歴史と展望」があり、会の歩みを振り返りつつ、今後の課題について新たな発展のための提案をなされました。これは、非常によく考察されたものだけに、その場限りのものにするのはもったいないもので、今後に生かしていくことが重要だと思います。

印象に残った発言を以下紹介します：コンサートと政党代表の憲法問題ディベートを開催し、200人の参加があった(栃木)；会員の増減を±0にすること。やめる要因は会員として何も役割を果たしていない場合なので、市民講座などで会員が話してもらい機会を持った。その結果、入会7名で退会7名にできた(宮城)；拠点になる大学で若手・院生会員を増やさないとJSAの未来はない。そのため教員の会員で相談している(東京)；全国の段階で広報担当をおくべきだ(山梨)など。

今大会の大きな議題の1つ、大会開催を2年に1回から毎年にするという規約改正案及び大会宣言などの決議3本を採択して終了した。

(北大工・江見清次郎)

第36回全国定期大会に参席して

大会でいちばん印象的だったのは、東京支部の院生会員諸氏の発言でした。

JSAの院生会員があらたに大学院に入ってきた院生たちを種々のセミナーに誘うと、意外に多くの院生が関心を示して参加し、そのセミナーの席では参加者がさうとうな盛りあがりを見せるそうです。そして、その参加者にJSA入会を誘うと一定の手ごたえがあ

り、東京のいくつかの大学では毎年あらたな院生会員を迎えているようです。

さいきんNGOやNPOなどの市民運動に参加する院生が増えているようですが、それは、若い研究者が社会的活動にかつていることの現われといえそうです。若い研究者のそうした社会的関心・社会的志向性について、東京のJSA院生会員たちは組織的な結集を

こころみており、一定の成果をおさめているようでした。全国的にJ S Aの若手会員がすくなくなっているなか、大会で紹介された東京支部のこの事例は、会場を元気づけるものでした。

大学院生たちはみなそれぞれに研究上の悩みや不安をかかえており、その話を他大学や他専攻の院生たちと交わすことはたいへん有意義だと思われまます。私にも経験がありますが「若手シンポジウム」や「夏の学校」で一—もしくはその準備過程で——知り合った院生の話の聞くと、分野によって、また大学によって、研究のありかたや院生生活がまるで異なることがわかり、視野が広がります。この経験によって大学院生は、自分がとりくん

でいることを広い学術世界のもとにとらえ、その意義の有無を問い直すことになるでしょう。

大学院生は日常的にそれぞれの分野の研究に禁欲的にいそしんでいます、それでもタコツボ的研究に疑問をいただき、社会のなかでの研究の意味づけや現代社会における科学のありかたを根源的に問おうとするのは、まことに自然で健全なことです。若い研究者の社会的関心はいまも健在なのでしょう。なんとかJ S A北海道支部でも、院生会員など若手研究者の問題意識を結集できないものかと思っています。

(北海学園大学 水野邦彦)

2005 年度北海道支部役員

(web 版では省略しています)

支部事務局職員勤務体制

大会で決定された予算に基づき、職員の勤務日数が週 5 日から 4 日に変更になります。今後の出勤曜日及び時間を以下のように予定していますので、ご協力よろしくお願ひします。なお、留守電、ファクスもありますので不在の際は、ご利用ください。

出勤日：月曜、水曜、木曜、金曜

時間：月、水、金は 12:00-15:00、木は 18:00-20:30